

第9回 夜間中学等に関する協議会 議事録

日 時 令和5年11月17日(金) 15時00分～16時30分

場 所 北海道庁別館7階 教育委員会室

1 開 会

【事務局：上野課長補佐】

それでは定刻になりましたので、ただ今から、「第9回夜間中学等に関する協議会」をはじめさせていただきます。事前の説明等させていただきます義務教育課の上野です。よろしくお願いいたします。本日は会場に集合とZoomの併用で開催させていただいております。

では次に、協議会の構成員についてですが、半数以上の方が変わられていますので、改めて皆様をご紹介いたします。札幌市教育委員会学校教育部長 長谷川様。本日は代理として学びのプロジェクト担当課長 田中様のご出席です。函館市教育委員会学校教育部長 小笠原様。Zoomでのご出席です。旭川市教育委員会学校教育部長 品田様。本日は代理として、教育政策課主幹 田村様がZoomでのご出席です。釧路市教育委員会学校教育部長 齋藤様。本日は代理として次長の森様がZoomでのご出席です。小樽市立長橋中学校校長 伊藤様。Zoomでのご出席です。北海道北広島高等学校校長 岩崎様。北海道PTA連合会副会長 廣瀬様。北海道に夜間中学を作る会共同代表 工藤様。札幌遠友塾自主夜間中学代表 黒澤様。北海道総務部教育法人局長 成田様。本日は代理として学事課学務調整担当課長 大久保様のご出席です。北海道大学大学院教育学研究院教授 横井様。北海道大学名誉教授 木村様。公益財団法人こども教育支援財団東京大志学園札幌校教室長 服部様。Zoomでのご出席です。最後に、北海道教育庁学校教育局 川端局長です。

次に、オブザーバーをご紹介します。北見市教育委員会指導室主幹 小野寺様、Zoomでのご出席です。

なお今回は、小樽市、苫小牧市、帯広市の教育委員会の皆様にも、本会をZoomでご視聴いただいております。

次に、本日の資料を確認させていただきます。まず、次第が1枚。次に資料1が「オンライン授業体験の開催結果」1枚。資料2が「国の夜間中学設置充実に向けた現状等」表紙を含め11枚です。そのほか、参加者名簿、会場図、協議会の開催要領と構成員名簿になります。

次に、次第をご覧ください。本日の議事ですが、報告事項「オンライン授業の試行実施について」、協議事項「広域な本道における学びの機会の充実について」になります。終了時刻は16時30分としております。

説明の最後になりますが、この会場でのご発言は音声をZoomで参加いただいている皆様に届けるため、川端局長の前の集音マイクを使用しておりますので、ご発言いただく際にはマイクに向かって少しゆっくりめをお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは議事に入らせていただきますが、開会の御挨拶を含め進行を学校教育局の川端局長が行います。

【川端構成員】

改めまして皆さんこんにちは。学校教育局の川端と申します。座って挨拶をさせていただきます。この会場にご参集の皆様、そして遠隔でご参加の皆様、本日は御多用の中、御出席いただきましてありが

とうございます。

また、皆様には日頃から本道教育の振興にお力添えをいただいておりますことに、心から感謝を申し上げます。

この「夜間中学等に関する協議会」は、道内の学齢期を経過した方のうち、様々な事情で義務教育段階の教育を十分に受けることができなかつた方で、その機会の提供を希望する方に対する夜間中学における就学の機会や、就学機会の提供につながる自主夜間中学等への支援などの取組等について協議することを目的として実施しており、国の動向などその時々情勢も踏まえ、一昨年度、昨年度は、この協議会のワーキンググループにおいて、主に遠隔教育などについて意見交換させていただきました。

このような中、夜間中学につきましては、本年6月16日に閣議決定されました「第4期教育振興基本計画」において、多様な教育ニーズへの対応と包摂性の政策としまして「全ての都道府県・指定都市に少なくとも一つの夜間中学が設置されるよう促進する」と明記されました。

また、指標として、全都道府県・指定都市にそれぞれ1か所ずつ設置するという5年後の目標値が示されました。

こうしたことを踏まえまして、本協議会においては、札幌市に現在あります夜間中学校以外の地域での設置の在り方についても、皆様からご意見をいただきたいと考えております。

市町村教育委員会の方にも構成員としてご参加いただいております。是非、広域な本道の学びの機会の充実に向けて、夜間中学の設置等を含め、それぞれのお立場から忌憚のない御意見を賜りますようお願いいたします。本日はどうぞよろしく願いいたします。

2 議 事

(1) 報告事項 「オンライン授業の試行実施について」

【川端構成員】

それでは、私の方で会議進行を務めさせていただきます。まず、「オンライン授業の試行実施について」ということで報告を事務局からいたします。

令和元年9月に札幌市が公立夜間中学の開校を表明したことを踏まえまして、道教委では、令和3年度からワーキンググループを設置して、本道の広域性を踏まえた学習機会の確保に向けて、主に遠隔教育を議題として検討を行って参りました。昨年11月には、星友館中学校と札幌遠友塾の皆様にご協力をいただきまして、第1回のオンライン授業の試行実施をいたしました。ここでは、有効性を感じたものの、様々な課題も見つかりましたので、改善策を皆様からいただきまして、第2回目を本年10月24日に実施いたしました。

本日はその2回目の実施結果について事務局から概要を説明いたします。その後、ご協力いただきました遠友塾自主夜間中学の黒澤代表に前回からの改善点と、課題としていた配信側の先生と受講会場とのつなぎ役となる授業サポートのあり方など、感想も発表いただきたいと考えております。それでは事務局から説明いたします。

【事務局：遠藤課長】

義務教育課の遠藤と申します。よろしく願いいたします。

資料1、オンライン授業体験の開催結果に基づいて報告をいたします。ご用意いただければと思います。オンライン授業の実施につきましては、「1 開催目的」にお示ししたとおり、道教委では、広域な本道において、義務教育段階の学び直しを希望する方々への学びの機会提供手段の一つとして、ICTを

活用したオンライン授業が有効と考えており、昨年実施しました。1回目の試行により見えてきました課題、例えば、「1人1台端末を活用した授業の進め方」、「受信側の板書の見え方」、「受講者の理解を深めるための授業サポートのあり方」など、こうした課題を踏まえ、本年10月24日、2回目のオンライン授業を試行いたしました。札幌市立星友館中学校を配信元に、札幌会場の他、今回新たに釧路会場を加え、2つの会場に授業を配信いたしました。

参加者については、札幌会場では、札幌遠友塾自主夜間中学の受講者8名、スタッフ13名の計21名。釧路会場では、釧路自主夜間中学くるかいの受講者2名、スタッフ4名の計6名に協力をいただきました。

また、星友館中学校の桑原先生が授業者となり、昨年度の実施を踏まえ、各会場には道教委で授業サポート役を1名ずつ配置しました。授業は国語「川柳」を題材に、40分間行いました。

一番下の授業後の感想のところですが、参加者からは、「授業者のテンポが良く、楽しい授業だった」「音声聞き取りにくいときがあった」「授業者が受講者個々の反応を十分把握できない状況で授業を行うため、スピードの調整が課題」などの声が寄せられました。

裏面をご覧ください。参加者のアンケート結果としては、受講者からは「授業が楽しかったか」につきましては、10名中、「とても面白かった」が6名。「面白かった」が3名。

「オンライン授業をまたやってみたいか」に関しては、「またやってみたい」が8名「どちらかというをやってみたい」が2名でした。

スタッフの方々からは、「受講会場にもホワイトボードを設置し、補助の板書をしていて良かった」「受講者がわからないときにすぐ対応できるスタッフが必要」、「対面形式と異なるため、受講者の疑問や要望を授業者にどう伝えるかが課題」などの感想、意見をいただきました。

また、11月7日には試行実施を踏まえ、オンライン授業関係者による意見交換を行いました。昨年度の試行実施で明らかとなった課題の解決に向けて、今回は、「受講者に1台ずつ端末を配布することをやめ、前方の大きなスクリーン画面で授業を映す」、「各受講会場にホワイトボードを置き、発信会場と同じ板書を行う」、「各受講会場に、サポート役を1人配置する」など改善を図ったところですが、音声画像の見え方については、「授業の画面を中央一つにして、大きく映し出したのが良かった」、「授業者には、発信会場の個々の受講者の様子が画面上で小さく見えただけで、楽しくやれているのかなど、雰囲気あまり伝わってこなかったが、サポート役の補助があったので助けられた」、「常に同時双方向で音声のやり取りができるのが理想だが、現状の機材では限界があるので、全会場において、マイクのオンオフで対応するなど工夫し、聞きやすさを優先する必要がある」などの意見をいただきました。

また、授業サポートのあり方については、「授業者とサポート役の事前の打ち合わせは非常に重要」、「オンライン授業は、基本的に一方通行になりがちなので、サポート役が受講者と授業者をつなぐ役割を担い、対話が生まれるよう配慮する必要がある」、「サポート役が授業の意図を理解した上で、全体の様子を把握し、受講者に伝えるといった授業の形が確立できた」などの意見をいただきました。

今後、道教委といたしましては、ICTを活用したオンライン授業の更なる改善に向けて、授業者から受講生の様子がわかるような映像配信の工夫や、授業が一方向的にならないよう、授業者と受講者との双方向のやり取りを増やすこと、受講者からの質問など発言しやすいサポートなどに留意し、試行を重ねていきたいと考えております。以上で報告を終わります。

【川端構成員】

ただいま事務局からオンライン授業について概要、反省点など報告がありました。実際に当日ご覧い

いただきました、遠友塾の黒澤代表からも感想やご意見などありましたらお話いただけますでしょうか。

【黒澤構成員】

札幌遠友塾自主夜間中学代表の黒澤晴一と申します。昨年に引き続き、夜間中学に関する協議会の構成員を依頼され、お引き受けいたしました。どうぞよろしく申し上げます。

また、構成員の方々には、日頃より各方面から札幌遠友塾をご支援いただいております。この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございます。

昨年に引き続きオンライン授業の試行に参加させていただきました。試行の前には担当者の方から案内や各種の資料を提供いただき、参加しやすかったです。今回は、昨年度の振り返りからいくつもの改善点が見られます。同時に次のステップアップへの課題も見られました。全般的なことについては、提示いただいた資料の中のアンケート結果や意見交換会の中に示されておりますのでよくわかると思います。

私からは、重複するかもしれませんが4点を簡単にお伝えいたします。

1点目。今回はなんとといっても、釧路自主夜間中学くるかいと一緒に参加できたことが大きな成果と感じました。行政、公立の夜間中学校、自主夜間中学が共同して実施することは意義あることだと思います。

2点目。お互いの通信や映像の手順についても、前回よりも改善が見られました。課題としては、双方向の音声でのやりとりが少しでもあればいいと思われまます。授業者と学習者の双方の交流、やり取りができることは、授業にとって大切な要素です。経費が掛かるかと思いますが、より良い高度な通信放送技術の必要性を感じました。

3点目。昨年は社会科、今回は国語科の授業でした。昨年同様、教材の選定や展開の工夫があり、興味深く面白い授業展開でした。授業者の教材研究やサポートの方々のご尽力の賜物と感じました。次へのステップとして、数学科や英語科などの積み重ねが大きな比重を占める教科についての考察、実践が必要になるかと思えます。星友館中学校や札幌遠友塾でも、様々な年代の方々から様々な学習履歴の方々がおられます。そのためにも、役割を明確にしたサポーターの支援は必要ですし、支援者は多いほどいいと思えます。

4点目。昨年に引き続き参加した札幌遠友塾の2名の受講生さんの簡単な感想をご紹介します。お2人とも女性です。

1人目。オンライン授業に参加して、川柳と俳句の違いなど、楽しく勉強をさせていただきました。『下腹に脂肪が集合密ですよ』つい自分のことかと下腹を見て、苦笑い。

2人目。オンライン授業を受けるのは2回目です。授業についていくのがやっとでした。でも、お隣に優しい先生がいてくださり、いろいろ教えてくださったので、楽しく学ぶことができました。ご準備等大変だったと思います。お気遣いもたくさんいただきました。関係者の皆様本当にありがとうございます。以上、簡単ですけど、ありがとうございました。

【川端構成員】

黒澤代表ありがとうございました。内容はもとよりですが当日の和やかな感じも、今のご感想から感じることができました。本当にありがとうございます。

書面での説明になり、実際には見ていただいておりますが、今のオンライン授業の実施結果について、いくつかご意見ご質問などをいただきたいと思えます。

はい、工藤代表お願いします。

【工藤構成員】

遠友塾の一員として、初めて参加しました。今回のオンライン授業の試行に参加した生徒の内、大多数が私の所属する1年生のクラスにいる方で（前回受けた方もいました）、中には学習が困難な方もいます。そのときに感じたことですが、事前準備に関することと、授業スピードに関して気がついたこと、とてもよかったことをお伝えします。

事前準備に関して、授業が始まる時にプリントが配られたのですが、片面印刷のA4サイズのものが3枚配られたと思います。授業が始まり、先生は「2枚目のプリント」を「1枚目の裏」という言い方をしたのですが、裏表印刷になっていないので、それだけで生徒さんが混乱するのです。ですから、事前準備は、受講者の困難さを様々予測した上で、関係者全員で行う必要があるだろうと思います。

それからもう一つは、授業者が生徒さんの顔が見えず、表情もよくわからない状況の中で、授業が一般的なスピードでやっていくわけです。普段の対面授業ですと、いろいろ表情を見てわかりますし、そばにいるスタッフが「先生ちょっと待って」とか、やるんですけどもそういうことができない。今回、私の隣にいた生徒さんが、まず、プリントの今どこをやっているのかを探すんですよ。慣れていないので。それから、自分の理解できないところが出てくると、なかなか先に進めない。しかし、先生の方が先に進んでしまう。これはオンラインにとって、極めて気をつけながら、どういうことを前もって準備したらいいのかということの一つの示唆になるだろうと思います。私達はやはり授業というのは一番わからない人に焦点を当てて授業を全て用意しますので、その点、今後の検討に期待したいと思っています。

それと、とても良かったことは、私達のクラスは、パソコンなどに全然触れたことがない方がほとんどですけれども、とにかく興味があります。やってみたい。わからないからやってみたい。だからそういう意味では、希望がもてるなと思いますし、そばにスタッフがついていれば、十分可能だということで、これは将来明るいなと思いました。

それから、授業の中で、二つ、とても夜間中学らしくていいなと思いましたのは、川柳の後半の部分。ある川柳に空いた語句を埋めるときに、本当に夜間中学ならではの答えがありました。一般的な答えは出てくるのですが、それ以外にある女性の方が出した答えが、旦那さんと一緒に暮らしていて、旦那さんが先に亡くなって、その一人暮らしの寂しさが、答えになる。だから点数や丸をもらう答えとは違う。これは夜間中学だから出てくるだろうということで、深みが増していると思いました。

それからもう一つは、例えば、その穴埋め問題、私も4題のうち、1つしかわからなかったんですけど、そうしたら、どうなるかということ、ガサガサ、ガヤガヤ相談が始まるんです。これが夜間中学の一番大きな特徴。すなわち自分ができればいい、自分の点数がよければいいという授業が成り立たなくて、みんなで相談し合って、我が物とするという解も厳然としてありますので、これは他の普通の学校ではないかもしれませんが、そういう授業のあり方というのも夜間中学の良いところだなと改めて感じました。以上です。

【川端構成員】

ありがとうございました。それでは当日の様子はご覧になっていない方からも、今の報告と感想等を聞いて、何かご意見をいただけたらと思います。長橋中の伊藤校長先生、ご発言いただいてもよろしいでしょうか。

【伊藤構成員】

こんにちは。伊藤でございます。本日はありがとうございます。

実際に見てはいませんが、今の報告からそのときの様子や、文面からも臨場感が伝わってまいります。

今、初めて色々な関わった方の話を聞いてみて、とても素晴らしいなとまず思いました。学び直すということは、若い10代後半の子どもたちでもそうですけれども、そうでない子どもも含めて、一念発起して何か取り組もうというその姿勢を私達が背中を押さない手はないかなというように思います。そういった意味でこういった環境整備に努めてくれていることは大変ありがたいと思います。

手法によっていろんな課題が見えてきて、その課題が次の試行への改善に繋がって、そして、実際に今、生の声で本当によかったという声も聞かれますし、多少面白くなかったという受講者がいたとしても、こういったように参加した中で成果が上がっているということがすごく大きいと思います。

自分自身が気づいた観点ですが、学習ですので困り感を見取ってあげて、それを充足してあげられる場面において、そこに焦点化したときに、今後、何がしてあげられるか。会場ではもちろんですけども、オンラインにおいて何がしてあげられるかというところ。現地スタッフの充実も必要だと思います。

この夜間中学に限らないんですけども、オンラインの仕組みをだんだん高めて深めていくと、授業の改善にも繋がっていくと思います。これは夜間中学に限らず私達、義務教育など公共の教育に携わる者にとっても、すごくこの取組というのが大きなヒントになると感想をもちました。私からは以上でございます。

【川端構成員】

伊藤校長先生ありがとうございました。

もうお1人感想をいただけたらと思いますが、どなたかいらっしゃいますでしょうか。釧路市の教育委員会の森次長、ご感想をいただいてもよろしいでしょうか。

【森構成員】

オンライン授業の開催について、ご連絡いただいていたのですが、私は見に行くことができませんでしたが、資料や先ほどの報告を聞かせていただきまして、受講した多くの方々にとってオンライン授業を体験して良かったんだなというところがわかりました。見に行ければよかったと残念に思っております。

釧路の方からはくるかいの学習者の方が2名参加ということで、離れているところでもこういった機会を設けていただけるのはとても嬉しく思っているところです。以上です。

【川端構成員】

ありがとうございました。今回2回目のオンラインの試行ということで、振り返りでの改善点、それから今日いただいた改善点などありましたので、また次に向けてより良いものにブラッシュアップしていきたいと思っています。

私も当日見ていましたが、オンラインだからできたこととはいえませんが、釧路の方と札幌の方が同じ時間に、学んでいるということは、すごいことだなと思って見ていました。参加者同士が交流するすとか、そういう場面もこの後考えていけたらいいのかなと思っています。ありがとうございました。

（2）協議事項 「広域な本道における学びの機会の充実について」

【川端構成員】

オンライン授業の試行についてはこの辺にとどめまして、本日の協議に入らせていただきたいと思っております。協議内容は事前にご案内しておりました「広域な本道における学びの機会の充実について」です。初めに冒頭挨拶でも少し触れましたが、国の夜間中学設置充実に向けた現状等について、事務局から簡

単に説明いたします。

【事務局：遠藤課長】

それでは資料 2、横版になっております「国の夜間中学設置・充実に向けた現状等」の資料に基づきまして、説明をいたします。

表紙の次、1 ページ目になりますが、まず全国の夜間中学の設置検討状況についてです。令和 5 年 4 月時点で 23 都道府県・指定都市に 44 校が設置されております。また、左上の「今後の設置予定」に記載がありますとおり、令和 6 年度に新たに 8 校が開校予定。令和 7 年度には 6 校が加わり、36 都道府県・指定都市に 58 校の公立夜間中学校が設置となる予定です。なお資料にはございませんが、令和 5 年 10 月時点では、令和 6 年度に福岡県大牟田市、令和 7 年度には鹿児島県において開校予定であることが公表されております。

資料 2 ページには、現在設置されている学校の一覧を参考までにお示ししております。

続きまして資料 3 ページになります。国におきましては、令和 4 年度夜間中学等に関する実態調査が実施されておりました、令和 5 年 1 月に調査結果が公表されております。調査対象は、一番上の四角、調査概要のとおりになっておりました、令和 4 年 5 月 1 日時点で実施されております。黒四角の二つ目、主な調査結果における全国的な傾向といたしましては、ぽつの二つ目になりますが、夜間中学に在籍する生徒の数が前回調査時と比べて 171 名減少しております。また、その下の矢印の一つ目にありますとおり、外国籍の方の減少が大きく、345 人の減少。一方で、矢印二つ目になります。日本国籍を有する方が 345 人から 519 人と 174 人増加しています。特に 10 代から 30 代までの若年層の生徒数は、右の図に示しておりますが、92 人から 223 人と 2 倍以上に増加をしております。属性別推移につきましては、右下の図のとおり入学希望既卒者の割合が約 43%から約 70%に高まっており、形式卒業者の増加とニーズの高まりの傾向があるとみられます。資料にはございませんが、北海道の状況、昨年 4 月に開校しました札幌市立星友館中学校の生徒数の状況につきましては、令和 4 年 4 月の段階では 66 名が、令和 5 年 11 月 1 日現在では 107 名となっております。星友館中学校につきましては、特定の年代に偏ることのない年齢構成となっております。

続きまして資料 4 ページ。昨年公表されました令和 2 年国勢調査の結果において、赤枠太枠で示しております、未就学者と最終卒業学校が小学校の方の人数を合わせた義務教育未修了者の数については、全国に約 90 万人存在することが明らかになり、設置に向けた取組の一層の推進が求められている状況でございます。

次の資料 5 ページになりますが、都道府県別の状況でございます。グラフ左にありますとおり、北海道における義務教育未修了者数については、約 5 万 8 千人と全国で一番多いことが判明しております。続いて資料 6 ページになります。このような中、資料中段、「教育振興基本計画」と書いてございますが、令和 5 年 6 月 16 日に閣議決定された計画におきまして、「全ての都道府県・指定都市に少なくとも一つの夜間中学が設置されるよう促進する」と明記され、「夜間中学の設置数の増加」が指標として設定されております。指標につきましては、5 年後を目標値として、全都道府県・指定都市への設置と示されております。

また、本年 7 月に行われました。文部科学省の「夜間中学設置促進説明会」で 5 年後の目標値について、67 都道府県・指定都市の設置を目指すという説明があったところです。

資料 7 ページは参考までにお付けしました。夜間中学における教育課程について示したものでございます。

資料 8 ページをご覧ください。夜間中学への生徒の受入れについてでございます。教育振興基本計画の中で、夜間中学において受け入れる生徒の拡大を図るなど、教育機会の確保等に関する施策を総合的に推進するとされておりますが、これまで国では夜間中学の受入れの対応として、入学希望既卒者につきましては、黒丸の一つ目、「一定要件のもと、受入れを可能とすること」。黒丸二つ目、不登校等によって義務教育を十分に受けられないまま卒業した者への対応として、「卒業時に夜間中学の意義や入学要件等について、生徒及び保護者に説明していくこと」が示されております。学齢生徒につきましては、夜間中学において、国から学びの多様化学校、不登校特例校という呼び方をしておりますが、承認を得ることで、現在不登校となっている生徒の受入れが可能となっております。現在、学齢生徒の受入れを行っている夜間中学は、香川県三豊市の高瀬中学校の 1 校。今後設置予定の福岡県大牟田市、三重県の夜間中学でも、学齢生徒の受入れを検討しているところです。

資料 9 ページをご覧ください。高等学校卒業者の受入れについてです。「高校卒業という形式面だけで判断せず、個別の事情を踏まえ柔軟に判断されたい」としております。

最後資料 10 ページになります。京都市の公立夜間中学校洛友中学校は、夜間学級として設置されており、昼間部は、学びの多様化学校、不登校特例校に指定されている中学校に併設されております。特色ある取組として、火曜日と木曜日の 5、6 時間目には、合同授業の実施、行事など交流学习の時間を設定しているので情報提供いたします。以上でございます。

【川端構成員】

ただいま夜間中学等に関わる国の動向や現状について事務局から説明をいたしました。今回の国の振興計画については 6 月に決定されたということで、この会で改めて皆様にお知らせという形で今日進めておりますが、北海道はご承知のように他県と違いまして広域性という地域特性がありますので、学び直しを希望する方々への機会の提供・充実については、地域の事情などもたくさんありますので、それに伴って様々な課題があると承知しています。ですから、時間をかけて話をしていく必要があると感じております。

そこです、本日、函館市、旭川市、釧路市の教育委員会の方にご参加いただいておりますので、これまでの教育委員会ですとか各市でのこんな話になっていましたとか、もし設置するとしたらこんな課題があるなというような、そういう話題になりましたことも含めてお伺いしたいと思っております。初めに、函館市教育委員会の小笠原部長からご紹介いただけますでしょうか。お願いいたします。

【小笠原構成員】

函館市教育委員会学校教育部の小笠原と申します。どうぞよろしく願いいたします。函館市といたしましては、まず子どもたちを含めまして、様々な年代の学習の機会の確保というのは、本当に重要なことであると考えているところでございます。

私どもの方では、生涯学習の場という形で、様々なことを学びたい方を対象に、まず「まなびっと広場」といった講座の開講をしています。それから、高齢者の方を対象に「高齢者大学」の実施もしております。さらに日本語を学びたいという外国籍の方を対象にした「日本語教室」の実施も進めているところでございます。

公立夜間中学の設立に関わりましては、今後も、この夜間中学等に関する協議会に参加させていただきながら、情報収集に努めていきたいと考えているところでございます。以上でございます。

【川端構成員】

はい、ありがとうございました。

それでは続きまして旭川市教育委員会の田村主幹、お願いできますでしょうか。

【田村構成員】

本日は、本市から学校教育部長の品田が参加する予定でしたが、急遽、私が参加させていただいております。本市にとって貴重な学びの場をありがとうございます。

さて、本日の協議会を通じて、本道の地理的状況を踏まえたオンライン授業の有用性や、国としての設置状況や設置促進の熱量を感じ取ることができました。本市においても検討すべき課題の一つとして認識しているところです。

現在本市では、調査研究を進めているところです。今年度におきましては、6月に実施されました文科省による夜間中学設置促進説明会や、9月に実施されました札幌遠友塾自主夜間中学および北海道に夜間中学をつくる会による北海道夜間中学交流会に参加し、夜間中学の必要性を感じているところです。

例えば、義務教育を修了しないまま学齢期を過ぎた方や、不登校など様々な事情により十分な教育を受けられないまま中学校を卒業した方、本国や我が国において十分に義務教育を受けられなかった外国籍の方等はもちろんのこと、一部ではありますが先ほども紹介されたとおり、現在中学校に在籍していて、不登校である生徒への支援を行っている夜間中学校があることを知り、昨今の不登校問題への対応の一助となる可能性を感じているところです。また、中学校の生徒の体験談から、年齢を重ねたり、途中で学びの機会を失ったりしても、学び直そうとする熱意を感じております。

今後も、札幌市の星友館中学校や自主夜間中学、他都市の動向、道教委の施策の推進に注視するとともに、まずは調査研究を着実に進めてまいります。

【川端構成員】

田村主幹ありがとうございました。

それでは続きまして、釧路市教育委員会の森次長、よろしく願いいたします。

【森構成員】

釧路市としましては、釧路市の教育課題の一つである、不登校生徒の増加というものがあまして、その対策の一つとして、公立夜間中学については検討している状況ではあります。先月、私ども学校教育部長と教育指導参事、私で星友館の方を視察させていただきまして、生徒の皆さんが真剣に授業に出ている様子ですとか、生き生きと参加されている様子などは拝見させていただきました。その際に、校長先生の方から、人員配置の状況ですとか、教育課程、カリキュラムなどのご説明をいただきまして、理解が深まったところでございます。

一方で、釧路市が解決する課題というのも明らかになってきたと思います。1点目としましては、生徒の通学方法です。札幌市では、地下鉄やバス、JRなどが9時を過ぎても動いているところですが、釧路市の場合は最終のバスが8時台、路線によっては7時台でなくなってしまうという状況ですので、星友館の授業のスタートが5時30分、終了が9時10分までということを知りまして、同じ時間帯で釧路市だと授業を受けるのは、通学面で難しいと考えている次第です。

また2点目としましては、需要の把握、入学する人の確保というのが、難しいというところが考えられました。釧路市において、夜間中学を必要とする外国人というのは、あまり多くはないかと考えております。ただ、形式卒業生ということをお考えた場合は、かなりの数がいるとは感じているのですが、実際に釧路市に夜間中学を開設した場合、どの程度の生徒が入学してくれるのか、在籍するのかという需要についても更なる研究が必要となると考えたところです。こちらの協議会に参加させていただきまして、今後も情報収集させていただきたいと思っております。以上です。

【川端構成員】

ありがとうございました。今、三つの市から現在の状況ですとか、それに伴って課題となっていることなどについてご紹介をいただきましたので、構成員の皆様方からもご意見をいただきたいと思います。はじめに、横井教授いかがでしょうか。

【横井構成員】

この協議会にはずっと参加させていただいています。まず札幌市に一つ、つくるということで、その話をずっと議論して、昨年度できました。大変良かったと思っております。

それでそこから、次にどうするかということが課題になって、広域な北海道でどのように夜間中学を整備していくか。以前にちょっと申し上げたことは、自主夜間中学がある三つの市では、それ相応に需要があるのではないかと私としては推測しているのですけれども、そこが実際どうなのかということ、そこをもう少し詰めていく必要があると先ほどの釧路の方のお話を聞いて思いました。

それから高齢者の方は、だんだん数は減ってくるかと思うのですけれども、不登校の数が29万9千ですか、もう30万とおそらくこのまままだ伸びるのではないのかと。それから、長期欠席に広げれば46万です。ですから、全国でいうと相当の数になってきていて、北海道でも増えていると思います。

そういう若い人たちの学びの機会が失われている状況が拡大していると思われまますので、そういう人たちの学びの場の一つとして、この夜間中学というのは、これから需要として増えるんじゃないかなとも思っています。その辺は推測の話なので、なかなかはっきりとは言えないのですけれども。

先ほどお話ししたとおり、まず三つの市では設置を検討できないかなと。それを進めていただきながら、当然全部カバーできないので、今日お話のあった遠隔授業を併用していく。もし三つの市の方が不安を覚えられるとするなら、遠隔の方を先に進めていけば、どのくらい需要があるか、もう少し見えてくるのではないかと思います。

【川端構成員】

ありがとうございました。

では、工藤代表いかがでしょうか。

【工藤構成員】

私は旭川出身なものですから、本当に旭川という町は、樺太からの引き揚げの人たちの問題等々、様々な問題を抱えている地域でございます。本当に学校に行けなかった人の多い地域でもありますので、まず旭川については、何としてでも早めに検討を進めていただきたいということ。

それから、これは逆に札幌よりも急いだ方がいいかもしれないのは、不登校特例校の申請を抱き合わせでやるのか、あるいは不登校特例校を別立てで考えていくのかという判断を、特に旭川市の場合には、大きな問題を抱えておりますので、そのあたりの判断も出てくるので、非常に困難だろうとは思っています。ただ幸いに札幌市と同じように連携中枢都市圏の機能をもっていますので、近隣の市町村の方が来れるという条件作りのためには、非常に良い条件をもっております。

例えば先ほど、文科省資料の中で「洛友中学校」ここはですね、入学できるのが、京都市内に住んでいる人、働いてる人だけなんです。京都府民だと駄目なんです。このようなことが、平然とまだ起きてるんです、全国では。だから、札幌市のように、近隣の市町村を包含するような形でないと、通いたい人が通えないということが現実にあるわけです。学びたいって言ってきてる人に、面と向かって来るなど言えますかということなんです。言えないなら検討してください、面倒くさがらずにやっってくださいということなんです。これも全国统一にされておられませんので、旭川はその意味では、せっかく

連携中枢都市圏というような機能をもっておりますので、ぜひご活用いただきたいなど。もう少しだろうと思います。

釧路については、何度も何度も今まで交わりを深めていますので、ここもあと一步。特に先ほど、どれくらいの人数が来るのかわからないということがありましたが、釧路の「くるかい」という自主夜中の動きを見ますと、意外と外国の方の問題が大きいです。札幌より大きいかもしれない。

意外と北海道の中では、外国から来られた人の問題が釧路に象徴的に表れてるかもしれないとも考えています。それから、不登校と外国から来られた方たちの把握の仕方については、札幌市が星友館中学校開設前に行ったアンケート調査を行いました、そのアンケート調査の仕方をぜひ参考にさせていただきたいと思います。

実は函館もいろいろな問題があるのですが、函館はどういう訳か、学ぶ人はもういないという思い込みがあるような気がします。思い込むと見えないんです。元々学ぶことができなかつた人が誰であるかは目に見えない。見た目には絶対わからない人について、どのようにその需要を把握するかという困難があります。

例えば今、札幌遠友塾という自主夜間中学は、必ず毎週毎週、ほとんど受講希望の見学がきます。そして、様々な事情を抱えている人が、今でも入ってきます。そうすると私達にとっては来るのが当たり前という感覚になる。ところが、ある町ではそんな人誰もいないという感覚からみると、何も見えてこないし、やろうとしないのではないかと思います。いずれにしても、もう一步のところまで来ているような感じです。

最後にお願ひですが、私達は今、遠友塾もそうですが、星友館と様々な面で交流を通じながら、お互いのノウハウを蓄積しながら今、前向きに改善に努めているところですので、ぜひ今後、北海道における公立の夜間中学については、ぜひこのような自主と公立の協働による成果を財産として生かしていただきたい。そのためにはこの協議会に、新たに星友館の方も構成員として常時参加して意見を述べていただきたいと思います。例えば先程のアンケート調査もそうなんです。そのような気がいたします。

【川端構成員】

ありがとうございました。今、皆様のご発言の中に不登校の児童生徒のお話が出てきていますが、現在、不登校などで十分に学べないまま形式的に卒業した生徒たちの学び直しをどうするかですとか、そういうことも問題になっており、その学び直しの場合として夜間中学が選択肢の一つとして、考えられています。本日、校長先生がお二人いらっしゃいますので、岩崎校長先生と伊藤校長先生から、学校現場の立場から夜間中学の必要性というか、お考えをお聞かせいただければと思います。岩崎校長先生からお願いいたします。

【岩崎構成員】

はい、よろしくお願ひいたします。今の私の勤務校とは限らずのお話をさせていただきますが、欠席時数ですとか、人間関係をうまく作れないというようなことで、集団での生活に馴染めずに、不登校になり、あるいは、かなり早い時期に通信制の学校に転校を考えるというような生徒は、学力が高い低いを抜きにしても、年々多くなってきているのというような印象を受けます。

実際にはその次の上級学校まで考えている生徒は、通信制の学校へ行くなりしてまず学力だけは付けるような学びを続けたいというような生徒が学校によっては多いのかは思うのですが、先ほどの資料にもありました形式だけで卒業したという生徒たちの中にも、これは私の想像も含めてですが、その子が本当に学んだ、自分は卒業した、というように思えていればいいと思うのですが、果たして本当に

思えてるのかというような疑問が若干あります。

というのは、漢字ですとかドリルですとか英単語ですとか数学ですとか、点数化できるものというのは、問題集を自分でやろうと思えばやれないことはないと思うんですけども、点数にならないもの、情緒的な成長ですとか、人と軋轢の中で解決した解決策ですとか、他者との違いを相手にぶつけるですとか、あるいはそれを受け入れるだとかというような、そういった教科科目とは違うような学び。また今、高校でも力をいれていますが、課題を見つけるですとか、探究的などの教科ということで振り分けることができないような学びにつきましては、これはたとえば家でやったレポートを出席とみなして、君は卒業できるよといったものでは、なかなか育てられない部分はあるのではないかという感想というか、感覚をもちました。

そう考えますと、形式的に卒業はできたけれども、何かこう学ぶ意欲が沸かないですとか、自分の人生を振り返ったときに他の人とぶつかるような学びがなかったとかというような生徒、あるいはもう少し歳をとった大人の中にも夜間中学のような場でもう1回学び直したいというような方もいるのではないかなというように思います。

その数がそんなに多くはないのかもしれませんが、その場があるとないのでは、全然違うのかと私は思いまして、在る、存在するということにすごく大きな意味があるのではないかというように感じております。以上です。

【川端構成員】

ありがとうございました。

では続きまして、伊藤校長先生お願いいたします。

【伊藤構成員】

自分の勤務校だけが北海道全体を網羅しているわけではもちろんないのですけれども、結構な数の不登校生徒がいて、それも本当に様々です。断続的な子もいれば、全くという子も色々いるのですが、私達が義務教育の中で指導することというのは、高等学校の円滑な入試に繋がりたいのはもちろんですけども、そこに至らない子たちにもその可能性をしっかりと示唆した上で、学校を卒業して行ってほしいなというように思っています。できれば、卒業して終わり、それこそ形式に卒業証書を渡して終わりではなくて、その後の関係性も大事にしながらということが一番かと思います。

夜間中学と考えたときに、例えば本当にいろんなケースがあると思います。不登校の傾向の子もいますでしょうし、本校を例にとりますと外国人もたくさんいます。そうなったときに、スピード感のある日本の授業の中でついていけなかったけれども、もう少しゆっくりめでも何とか日本語を学べないだろうかという子どもが出てくる可能性もあろうと思います。そして、不登校の子についても先ほど出てきました札幌と連携協定を結んでいる街でもあり、小樽市の立地からしますと、かなり細長い街なものですから、札幌にほど近い学校もありますので、この連携協定をいかしながら、今現在、通っている子もおります。そういった子が学んでみようとするチャンスというのは、私達の義務教育の指導の中でも大切でしょうし、あとは、社会全体がそういう意識を高めながら働きかけていかなければならないなと思っています。課題が多いのですが、考えることを進めない、考えることを止めてしまうと、結果には繋がらないし、答えに近づかないという部分をもつことが現場としてもすごく大事ななというように思って過ごしております。どの自治体がどのようにできるかとか、どういう形式があるかという課題はあると思いますが、ぜひ進めていただきたい事業だと思っています。以上でございます。

【川端構成員】

ありがとうございました。ちょうど協議の残り時間が 30 分ほどになりました。ご参加いただいている方、皆様からお声をいただきたいと思っておりますので、オンラインのことですとか不登校のことですとかいろいろ観点をお話しながらご意見をいただいておりますが、ここからは、これまでの報告ですとか、皆様のご意見なども踏まえてお考えになっていることをざっくばらんにお聞かせいただければと思います。PTA 連合会の廣瀬副会長、いかがでしょうか。

【廣瀬構成員】

今年度からこの会に参加させていただきます。北海道 PTA 連合会副会長の廣瀬と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今、たくさんお話を聞かせていただきまして、また、本日、参加するにあたって色々な資料を見て勉強させていただきました。

PTA の立場でお話させてもらいますと、やはり先ほど横井教授からもあったように、間違いなく皆さんあんまり言葉にしたくない、もう忘れたいコロナというのがあったために、ますます不登校という、学校に行けない子どもたちの数が現実が増えていきます。私の周りでも行けなくなった子が多いです。校長先生方をはじめ各学校さんは一生懸命やっていただいて、何とか学校に来るような環境作りをずっとやっていただいたんですけども、コロナになったときからどうしても学校に強制的に呼べなくなりました。今までは直接お電話して、たとえば「〇〇さんちょっと出てきて、先生方と話をしないかい」とか、一生懸命各担任の先生や校長先生がいろいろ動いていただいていたのですが、コロナがあったために、生徒側の言い訳として、「家族の調子が悪いからいけないんだ」と言われてしまうと、それ以上、先生方はアクションできなくなってしまう。じゃあ、行かなくていいのかというのが約 3 年ぐらい続いてしまった。今までは 1 年間の間にちょっとでも学校に行ってみようかな、先生に呼ばれたらちょっとでも行ってみようかなとか、教育委員会さんに少し足を運んでみようかなと言っていた子がいましたが、本当にゼロになってしまっている。そういう子どもたちがますます増えてくるというのがわかります。先ほどのこの資料にもありますが、義務教育未修了者が北海道のこの広さで 6 万人を超える勢いでいきますと、やはり受け入れていただける環境を整えていただくのが一番なのかなというのももちろんありますし、私達保護者も後ろから押してあげなきゃいけない部分もありますし、先ほどのオンラインの話もありましたが、やはりその環境が整っていないと難しいと思います。

配信で授業をやっても、今回、受講する会場にそれなりのサポーターの方がいらっしゃるということでしたけど、そこに有力な方もいないとなかなか難しいことだと思います。

今、Zoom というのがすごく、このコロナで広がってきましたけど、やはり普通の説明会ですと、一方通行でいいのかもしれないですが、やはり小学校、中学校、高校の授業というのは、行き来がないと成立しないと思います。先生が、この生徒はわかっていないなという顔をしているのを受け取って、気づいていただかないと。こういうところに来る子というのは、手を挙げて先生これわかりませんと言えない子もたくさんいるかもしれないので、そこにやはりサポーターの方がいて、少しわからなかったら横に寄り添ってあげる気持ちだけで、心が開けるのではないかなとも思います。ぜひ、何とか地域でこれはもうやっていくしか方法がないのではないかなというのがあります。

あと、学校でも使われているタブレットですが、子どもたちが今すごく興味をもっている部分です。僕たち大人よりも早いですし、どんどんどんどん先に進もうとします。こういうのにも興味をもってもらい、触ってもらえる環境を整えるというのも一つではないかと思えます。以上です。ありがとうございます。

【川端構成員】

はい。ありがとうございました。

それでは、北海道大学の木村名誉教授、いかがでしょうか。

【木村構成員】

2つ意見を言いたいと思います。一つはオンライン授業のことです。北海道の特性というのは、大学が、都市にはあるけど地方にはなくて、そこに自宅からは通うことができない地域がたくさんあるということです。北海道と札幌市が行った、子どもと家族の調査報告書の中でも大学が自分の町にないということで、大学進学希望自体がなくなる、そういう関係があることが指摘されています。夜間中学もないわけだから行く可能性がなければ当然要求も生まれませんということです。そういう意味では、札幌に夜間中学ができたことが、今、十分に中学校で学ぶことができなかった人たちの意識にどういう影響を与えたのかをちゃんと検証する必要があるということです。

オンラインの活用は夜間中学の問題だけではなくて北海道教育全体の問題だし、学校と生徒の間の問題だけではなくて、例えばへき地で孤立している若い先生がどうやって研修したりするのかなど、教育全体の問題なので、きちんとオンラインを北海道の教育の中でどういうように位置づけていくのかを検討する必要があります。それと、この実験の中で、サポーターの必要性ということも明らかになったので、サポーターをどう確保するのかということは、学校教育だけではなくて生涯学習とか社会教育の課題でもあるので、もう一度、広い土俵の中でオンラインをどう活用するかということも位置づけ直して、議論する必要があるのではないかと思います。

それともう一つは、札幌の星友館の実践から学ぶということがすごく大事だと思っています。星友館のホームページを見てみていくつか気がついたことがあります。一生懸命努力をされて、学校と生徒たちが一体になって新しい学校を作るんだという雰囲気が伝わってくるんですが、今年度の前期の学校評価アンケートが載っていますが、108名の在籍者のうち回答したのは62名で、回答率は57.4%です。ほとんど概ね肯定的な回答が80%以上あるのですが、なぜ回答率が低いのかということに、回答率が低いのは、昨年度同様、出席率が低いことが主な理由だと思われるというように書いてあります。星友館の子どもたちは夜間中学ができたものの、出席率は必ずしも高くはないと書いておられるのです。なぜ、出席率が低いのか、どういう生徒達が欠席してしまうのか、あるいは欠席せざるを得ないのかというのもきちんと検討する必要があるのではないかと思います。

私は、一人親家庭の高校生に毎月1万円の奨学金を給付するという公益財団法人の代表をしていますけれども、コープ札幌を母体としている公益財団法人でして、これまで年間3500万円の事業をしてきましたが、コロナ禍のなかで寄付金が増えて年間1億円の事業をするようになりました。コープの収益は、年度ごとに変わり、寄付金の額は変わるけれども、奨学生の採用数は、簡単に今年は200人で来年は100人とするというわけにはいかないのです。そうすると、奨学生を増やすだけではなくて、どんな支援をすることができるのかと考えると、例えば夜間中学で、困難を抱えてなかなか継続的に就学することができない子どもたちにどういう支援が必要なのか、ということも私たちに考えていきたいと思っています。

【川端構成員】

ありがとうございました。それでは続きまして、東京大志学園札幌校の服部教室長からお願いできますでしょうか。

【服部構成員】

よろしく願いいたします。いろいろお話の方聞かせていただいて、今は当校では、フリースクールという形で運営をさせていただいておりますけれども、子どもたちが自分の家、在籍する学校、当校のフリースクールが第3の居場所になればと考えています。それと同じく夜間中学校が、子どもたちにとって家でも学校でもなく、何か居心地のいい場所になっていく、子どもたちの居場所になればと感じています。

ちょうど預かっている子どもたちが、小学校5年生から中学校3年生までの子どもたちになりますが、学び直しという観点からすると、勉強、学力の部分になってくると思いますが、私はもう一つ、人と交わるコミュニケーション力が10代・20代の若い世代の方にとっては大事になってくるのではと感じています。これから社会に出ていく世代ですので、学び直しの中で最低限の学力を身に付けながら、他の人と交わって話をしていくコミュニケーション力を、対面ももちろんですけども、今日オンラインという言葉もたくさん出ていたと思いますが、オンラインの中でも取組ができればよいと感じました。

もう一つ、夜間中学校の中には様々な世代の人たちがいらっしやると思います。その中で年齢や世代を超えた交わりがあることは、当校は、小学校5年生から中学3年生ですけども、もっと活発な交流ができるのではないかなと可能性も感じております。

あともう一つオンラインの部分で言うのであれば、授業をする授業者の育成も、考える観点なのではと思っています。私自身もオンラインの授業をやったことがありますけれども、機械操作の部分であったり、音声途中で途切れたり、授業スピードの問題があったり、いろいろななかなか難しい部分がありました。そういう意味で授業者を育成していくところも、均一的な教育を提供していく点では、大切なところなのではないかと感じております。

私からは以上になります。ありがとうございます。

【川端構成員】

ありがとうございました。

それでは、遠友塾の黒澤代表からもお話しいただけますでしょうか。

【黒澤構成員】

私が、札幌遠友塾に携わってから11年目になるのですが、特別支援学校、いわゆる高等養護を出て社会に出て、数年経ってもまれて、また学び直したいという人がいます。それは社会に出てみたら、自分の数学的なことが通用しなかったのです。それで人間関係がだめになり、遠友塾に来て、数学を一生懸命頑張っている方、そういういわゆる特別支援学校をきっちりと卒業したあと、数年社会に出てもまれてから、また学び直さざるを得ないような方も既にきております。

もう一つはやっぱり不登校です。3週間ほど前にも1人、中学校3年生の男子生徒とお母さんと2人で面会に来られました。それで、現在向陵中学校お借りしてるんですけど、その玄関前で私と一緒に待っているときにお話ししていたとき、震えてました。教室に入るかどうか声かけはしたんですけども、入るかなとだまって見ていたら、お母さんからの声かけで、本人が教室に入ったんですね。1年生のクラスに入って授業を受けるときにプリントを渡されました。ものすごく書いて勉強してるんですよ。黙って見学すればよいではなくて、自分がやってることが少しでもわかるとものすごく一生懸命。すなわち学びたい意欲がたくさんあったのです。

ところが、2回目にもう1回他のクラスを見学したいという連絡があって、「じっくりクラス」というクラスがありまして、そこは個別学習をしていますが、そうしたら、間の悪いことに、翌週来るはずだったのですが、お母さんから電話が来まして、お姉さんがコロナにかかってしまって、行くにご迷惑か

けるので1週間休みました。休んだら駄目でした。本人がまた閉じこもってしまった。

だから、先ほどお話に出ていたように、こっちは刺激しないけれども、お母さんにもう1回電話した方がいいものなのか、手紙を書いた方がいいのか迷ってます。でも今は、その担当者と声かけをしないであっちから来るのをちょっと待ってみましょうと話しており、私もそのつもりであります。そういうのが増えてきている。すなわち、不登校の子どもたちは、学びたいことがいっぱいあるんだということをお話改めて感じました。

2点目。横井先生の授業のときに札幌遠友塾のお話が出て、その授業を受けた生徒さんがお1人で来たのです。私と工藤さんと2人でお話をし、そして見学して帰っていったのですが、その方は過去、不登校だったんだそうです。彼はたった1人で遠友塾に来て、見学されていきました。一瞬、私は、ぜひ先生になってもらいたいなと思いました。そういう例もあります。これからは不登校は増えてくるのかなと思っており、先生方も、もう少し余裕があったらきっといろんな対応ができるかもしれない、そのように思っております。以上です。

【川端構成員】

ありがとうございました。では、残りも限られてまいりましたので、全体を通してということで、お三方からお話いただこうと思います。

はじめに札幌市教育委員会の田中学びのプロジェクト担当課長をお願いします。

【田中構成員】

札幌市の田中です。よろしくお願いします。まずオンライン授業についてです。これについては、星友館の校長先生から伝言を預かっています。オンライン授業を今回やってみて、受信側にサポーターがいるというのが非常に大事だなと感じたところです。サポーターがいても情報交換がなかなか難しかったという話でしたので、いなかったらもっと難しかったらと思います。なので、非常に必須というように感じたということと、今後もオンラインには限らず、引き続き道教委さんに協力したいという力強いお言葉もいただいておりますのでお伝えさせていただきます。

次に、札幌市においては、連携中枢都市というのを作っており、連携している市町村から星友館中学校に入学が可能で、通学されている生徒がいらっしゃいます。さらに今だと苫小牧市からも来ていただいており、そこにこだわらずに受け入れているという状況があります。北海道さんから時間講師を派遣いただいており、その協力があるからできることかと今は思っているところです。

それと不登校の関係ですが、星友館においても、やはり不登校経験者であった方がいらっしゃるの間違いありません。受け皿として活用されているものというように認識しておりますので、不登校の対応になったのちに、学齢期を過ぎた後の対応をしているという一面もあるのかというように思っています。

それと星友館の状況としては、ご存じのとおり令和4年4月に開校して、当初60人ぐらい来るのかという想定で全てを進めていたのですが、さきほどお話の中ででてきていましたが、現在、107人いらっしゃるということです。想定よりも多い状況になっています。来年度ももしかしたらそれよりも増えるかどうかということで今考えているところです。先ほど事務局からの説明にもありましたが、年齢構成は、いろいろですが、年代で一番多いのが20代、その次が70代という状況です。外国籍の方については、今、1割ぐらいしかいない状況です。もう少しくるのかなと思っていましたが、今後どうなるか、もしかしたら情報が伝わってないのかどうか、そこら辺はちょっとわからないですけど、他都市の状況を見るとその辺もちょっと増えてくる可能性があるのかなというように思っているところです。

あとは、市としてはやっぱり生徒が多くなってもできるだけ、ハード的な問題はどうしてもありますが、そこがクリアできればできるだけ受け入れて行きたいというように思っているところです。以上になります。

【川端構成員】

ありがとうございました。

それでは、総務部学事課の大久保課長、お願いできますでしょうか。

【大久保構成員】

知事部局の総務部学事課の大久保と申します。本日、夜間中学の設置等に関する国の動きですとか設置状況ですとか、あと星友館中学校さんの取組、また、自主夜間中学のこと等色々お話を聞かせいただきまして、ありがとうございます。大変勉強になりました。貴重なお話をありがとうございました。

皆さんからもお話が出ていましたけれども、やっぱり不登校の児童生徒が増加しているということが言われておりまして、その中で様々な事情で十分な教育が受けられなかったという方が増えてきているということは事実としてあるのかなというように思っております。そのような方々に向けたお話を聞かせていただき、やはり、その方々の学び直しもありますし、あと居場所作りというのがあります。あと、その人によっては、社会復帰といいますか、社会の接点といいますか、そういったものにもなり得るのかというようにお話を聞かせていただきました。

またその一方で、北海道は広域分散型の特徴がありますので、色々通学手段を含めて、設置ということに関しては、色々課題があるというように聞かせていただきましたけれども、その取組の一つとして、オンライン授業の試行があったと思っております。オンライン授業を行った成果、あるいは課題を含めて、色々お話を聞かせていただきましたけれども、こうした協議会を通じまして、皆さんで取組事例に対して課題等を話し合い、協力しながら一歩ずつ取組を前に進めることが大事なのかなと感じました。感想になってしまって大変申し訳ありませんが、私の話とさせていただきます。ありがとうございました。

【川端構成員】

ありがとうございました。では、本日、オブザーバーとして北見市教育委員会の小野寺主幹にも会議の様子を見ていただいております。小野寺主幹から一言いただけますでしょうか。

【小野寺オブザーバー】

北見市教育委員会の小野寺でございます。本日は、このような貴重な会議にお招きいただきありがとうございます。北見市、ひいてはオホーツクの現状なんですけれども、北見市に民間の夜間中学が昨年度、開設されております。

やはり現状では不登校の生徒で、いわゆる学齢児童が参加しているのが中心で、従前の夜間中学とは違った形ですが、実際に通っている児童生徒の様子を見ると意欲的な様子がありますので、やはり学びの場が必要だということは、どこの地域もあるかと思っております。

先ほどお話があったとおり、オホーツクもかなり広大な地域ですので、北見市では公共交通機関による移動距離が遠く、難しい部分もあるので、非常に札幌とは完全に比較にならないかということがあります。

今後、この貴重な協議会に参加していることを教育委員会でも共有しまして、引き続き、調査研究を進めてまいります。本当に今回は、ありがとうございました。以上でございます。

【川端構成員】

小野寺主幹ありがとうございました。まだまだ、もう一回り皆様からご意見をいただきたいところですが、予定された時間になりましたので、会の終わりにしたいと思いますが、本日は国の動きを切り口に、皆様からご意見をいただきました。

まず、3市の教育委員会の皆様には、なかなかお話しにくいところもたくさんあったと思いますが、現在の状況をお伝えいただきまして本当にありがとうございました。私達も必要な情報提供をきめ細かくしていきたいと思っております。あと構成員の皆様にはそれぞれのお立場から、学び直したいという気持ちをもっている方にどうやって寄り添っていくかという視点で、たくさんお話をいただきました。

また、オンラインについては、ご参加いただいていない方からも、別な視点での示唆をたくさんいただきましたので、オンラインだけで全てがまかなえるものではないとは思いますが、設置に向けた検討とそこにオンラインがどのように効果を発揮できるのかという視点で、我々も考えていきたいと思っております。

途中で伊藤校長先生が、いろいろ課題はあるけれども考えるのを止めるのはよろしくないという本当に力強いお言葉をいただきましたので、我々も皆様方と意見交換を積み重ねながら、学びを求めている人たちの機会の充実に努めていきたいと思っております。引き続き、皆様方といろいろな情報交換をさせていただきながら進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。それでは協議の方を終了させていただきたいと思っております。

以上をもちまして、「夜間中学等に関する協議会」を終了させていただきます。お天気の悪い中、お集まりいただきまして、ありがとうございました。引き続きよろしくお願いいたします。